

私 の 工 夫

学びをつなげる・ひろげる・ふかめる
「探究的な学習サイクル」

美作市立大原小学校

教諭 山本 庄太



1 はじめに

本校に通っている児童が、これからの予測不可能な時代を生き抜くためには、どのような力が必要なのか。また、本校の教育活動を通して、育てたい子ども像とはどのようなものなのか。教育活動の本質を問い直し、職員で意見を出し合った4年前。「課題を見つける姿」「自主的に学ぶ姿」「楽しんで学ぶ姿」「新たな価値を見出す姿」「獲得した知識・技能をしようとする姿」…。これらの姿を目指すために、まずは国語科を通して2年間、「利活用」をキーワードに研究を進めた。そして昨年度から総合的な学習の時間を本校の研究の中心に位置付けた。総合的な学習の時間とはどのようなものなのか、本校の現状はどうなっているのか等、職員で共通認識のもと研究を進めることとした。今まで取り組んできた学習を「探究的な学習サイクル」「地域での学び（貢献）」「ふ

りかえり」をキーワードとして実践することから始めた。

2 うまれた大原型

探究的サイクル

「探究的な学習サイクル」を視覚化し、児童・授業者・他職員で共有する「取組を行った。図1のように、学習過程の「課題発見」「情報収集」「整理分析」「まとめ表現」を縦軸とし、横軸を時間的発展として「発見」「追究」「提案」「熟成」「貢献」と設定。そこに学習計画を当てはめて示すことで、探究的な学習サイクルが発展的に繰り返されることを視覚化したものを作成した。今までどの学習過程における学びなのか、曖昧で、探究サイクルが1サイクルだけの単発的な学びとなっていたものを繋ぎ合わせることを意識した。また、各学年で育成したい力に基づき、1年生「大すき見つけ」2年生

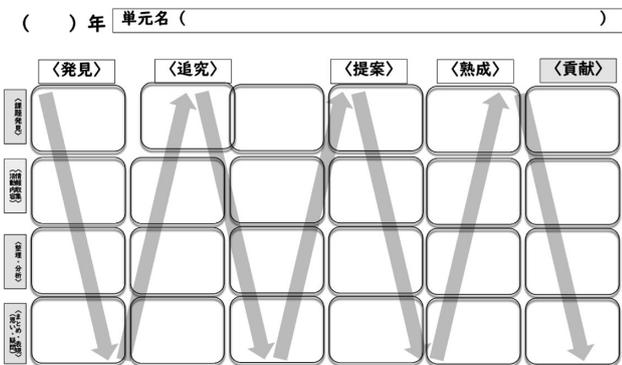


図1 探究的な学習サイクル

「ふしぎ発見」3年生「見つける」4年生「支える」5年生「みがく」6年生「つなげる」とテーマを設定した。これらのテーマに沿って大原型PBL（地域への貢献・アウトプット）を行うことを大切にしたい。

さらに「他教科とのつながり」も関連表を作成し示すことで、総合的な学習を中核とした教科横断的な学びを意識することができるようになり、各教科での学びを「利活用」することを重視した。

ふりかえり用紙には連続性をもたせ、本時のふりかえりが次時のめあてになるようにするとともに、学びが常に自分自身の生き方に繋がる意識をもたせた(図2)。

ここから昨年度の4年生の実践を紹介する。揺籃期となる最初の「課題発見」の学習過程を大切にしたい。児童の想いを出し合うことや、これまで先輩たちがどのような学習を進めてきたのか、4年生での各教科でどのような学習が展開されるのかなどの情報を共有することで、児童の学習への想いを膨らませた。その上で、4年生の学習テーマ「支える」に沿って、『水・ゴミについての学習』を進めることとした。

3 想いを大きく膨らませエナ ルギーを溜める

ふりかえり

①前までの時間とかわった自分の考え (前はこう思っていたけど、今日は～)
②高まった力 (※～の活動をして○○の力が高まった)
③気づいたこと、思ったことなんでも
④これからしたいこと
(次の総合では、次の活動では～)

月	日	()	月	日	()	月	日	()

図2 ふりかえりの連続性

4 学びの連続性

例えば、「小学校で使われている水の使い方を調べよう」という学習では、児童が自分たちで全校児童・職員を対象にアンケートを実施し、得られた情報を整理・分析した上で方法を選択してまとめ、アウトプットした。1サイクル終了時には、次の「課題」になり得る「小学校の水はどのようにやってきて、どこに向か



図3 開発した商品



図5 ユニセフへの募金

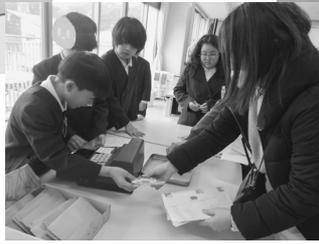


図4 参観日での販売

うのだろう」や、「川はきれいなのだろうか」など、社会科とのつながりや地域へ視点が向かう意見を、児童のふりかえりやつぶやきから抽出し、学習を展開していくことを大切にしました。

また、他教科の学びを必要感をもって行うことができた。例えば、社会科で水の働きについて学習し、児童が自分たちができそうなことを考えたり、国語科の「メモの工夫」では校外学習やお家の方へのインタビュー（家庭学習）に活用したりする様子が見られた。

5 本物との出会い

学びの過程で、児童の「ゴミが川や海（大切な水）を汚している」「ゴミを捨てないように呼びかけを行いたい」という想いが強くなった。そこで、海のゴミについて研究し、活動をしている地域の高校生をゲストティーチャーとして迎え、授業を実施した。児童はゴミをより良いものに変える「アップサイクル」という視点を学び、それを生かした商品開発や（図3）、新聞・ポスター・スライドの作成を通して、自分たちの想いを地域に伝えることができるのではないかと考えた。掲示物を作成するグループの児童は、今までの学習過程で作成してきたものを、さらに

分かりやすく、情報を整理・分析するなどしてより良いものへと改善することを大切にしたい。このことから、学びが繋がっていることを意識している姿を見ることができた。

掲示物についてどこに貼れば地域の方々の目に留まるのかを考え、児童自ら直接電話をかけ、目的を伝え交渉を行い、届けに行った。また、参観日を利用し、学習のプレゼンテーションを行い、開発をした商品販売した。そこで得た収益を水に困っている世界の子どもたちの役に立つよう、ユニセフに募金した（図4、5）。

自分たちの学習が学校の中だけで完結するのではなく、地域や地域外へと広がっていく経験をする事ができた。

6 おわりに

総合的な学習の時間において、児童は、学校内で学びを完結するのではなく、自分たちの活動が地域（人・もの・こと）の協力・活用により「本物」になる経験を通して、より、必要感をもって学習に臨むことができている。また、ふりかえりで見己の生き方を考えることができ、地域に貢献する喜びも感じることができた。6年生の実践では、「スパーが遠い」という地域の方の声か

ら「移動販売車の定期訪問の実現」や、「水路が危ない」という意見から「柵の設置の実現」を果たした。

1年間を通して、総合的な学習において「探究的な学習サイクル」を児童・職員で共有する有効性を感じることができた。学年テーマ（+探究課題）を柱とし、学びが途切れることなく、発展的に繰り返すことで、4年前に目指した「育てたい子ども姿」に近づいていると実感している（図6）。

教師は、育成したい資質・能力を目指しながら、児童の「やりたい」を受け止め、ファシリテートする難しさを感じながら研究を進めている。しかし、そこにももしろさ（醍醐味）があるとも感じる。児童を主語とし、児童・職員・地域が一体となつて学習が展開できるように努めていきたい。



図6 大原型探究的サイクル掲示

私 の 工 夫

特別支援教育の推進に向けた取組
〜特別支援教育コーディネーターと指導教諭の立場を踏まえて〜

県立岡山東支援学校

指導教諭 平松 宏史



1 はじめに

近年、学校種を問わず、障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けた特別支援教育の充実が求められている。『発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン』（平成29年、文部科学省）では、学校園で組織的な対応を行うための体制整備に向けて、特別支援教育コーディネーターの役割が示されている（29〜32頁）。役割として、①学校内の関係者や関係機関との連絡調整、②各学級担任への支援、③巡回相談員や専門家チームとの連携、④学校内の児童等の実態把握と情報収集の推進が紹介されている。

私は、指導教諭として本校における教育指導の充実に努めるとと

もに、特別支援教育コーディネーターとして校内外の支援に取り組んでいる。これら二つの業務内容は、特別支援教育の推進に重要であり、相互に関連し合っている。特に校内の教育指導の充実においては、特別支援教育コーディネーターの役割が校内支援の要として大きい。ここでは、二つの役割を生かした校内支援の取組を紹介したい。

2 授業のユニバーサルデザイン（以下、UD）

障害による学習上や生活上の困難さを抱える児童生徒に対する日々の学習指導においては、安心して見通しをもちながら学習目標の達成ができるような授業づくりが大切になる。加えて、児童生徒

自らが「わかった」「できた」という成長を肯定的に実感できるような支援の工夫も求められる。これらを踏まえて、学級担任の先生方の授業や、授業改善を推進する校内研究係の先生方への指導助言を通して、UDを意識した授業づくりを進めている。特別支援学校での具体的な授業づくりのポイントを紹介する。

【視覚化】

- ・ 学習予定（活動、時間、量）を板書やTV投影等の視覚的情報で提示する。
- ・ 発表や活動を行う上でのルールを、いつでも目で見て確認できるように提示する。
- ・ 児童生徒の発言内容について、動作や写真、イラスト等を用いた視覚的情報を添えて提示する。

【焦点化】

- ・ 単位時間の学習のねらいを明確化し、ねらいにそった「めあての提示」と「振り返り」を実施する。
- ・ 学習のねらいに迫るための支援（発問、ICT活用、学習形態等）をシンプルに具体化する。

【共有化】

- ・ 自分の学習理解や達成状況を確認

認したり、他者に認めてもらうよさを実感したりすることができるよう発表の場面を設定する。

3 発達障害の特性理解をめざした校内研修の実施

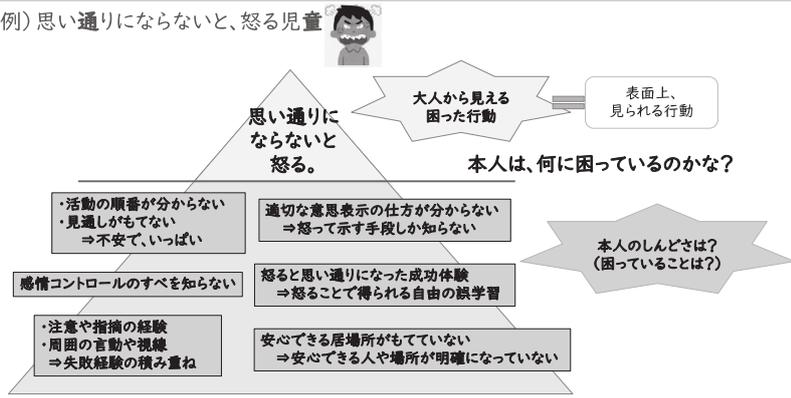
UD化された授業実践を行った上で、障害特性により、更なる特別な支援を必要とする児童生徒への個別の対応が求められている。対応においては、障害特性（強み・困難さ）について理解を深めることで、有効な手立てや対応の糸口を得ることができる。そこで、発達障害の疑似体験を取り入れた校内研修の企画・実施を行った。困難さを体験することで、児童生徒個々に対応した必要な支援や配慮について気付き、取り入れる職場の風土の醸造につなげることができた。

さらに、障害特性の理解を踏まえ、「学習上又は生活上の困難さを主体的に改善・克服する」ための自立活動の指導の充実に繋げている。

障害特性による困難さが強く表れている際には、「スキッター

①行動の背景要因を考える

例) 思い通りにならないと、怒る児童



「プロット」という手法を用いることがある。これは、課題となっている行動について、生じやすい場面や時間帯、状況などを整理するために、2週間程度の記録を取るものである。表面的な行動を情報収集して整理することで、困難さが表れている行動について、表面的には見えにくい背景要因の部分からも分析をしていく糸口となり、有効に活用している。

在学中から卒業後の社会参加に至るまで、子どもたちが地域で切れ目なく支援を受けられるように、学校と家庭に加えて、福祉（放課後等デイサービス事業所など）の三者間で、相互理解や情報共有を行う連携の推進（トライアングルプロジェクト）が求められている。

4 トライアングルプロジェクトの構築

ターゲットとなる行動	(例) 離席をする (例) 大きな声で叫ぶ (例) 物にあたる (攻撃する) など ※誰が見ても明確に判断できる行動					
○月	1	2	3	4	5	強度
発生時刻 (活動場面)	月	火	水	木	金	強 教室の外まで飛び出す
登校～教室						中 離席して立ち歩く
荷物の整理						弱 離席する
個別課題						
休憩						
朝の会						
朝の運動						
休憩						
国語・算数						

(例) スキャッタープロット

「ケース会議」については、特別支援教育コーディネーターの役割を生かし、相談支援専門員との連携・協力を大切にして進めている。また、支援者間で必要な合理的配慮や支援内容を共通理解して取り組むことができるように、学校が作成する『個別の教育支援計



本校でも、この趣旨の重要性を踏まえ、登下校時における福祉サービス事業所の方との細やかな引き継ぎ（情報共有）だけでなく、必要に応じて、担任、福祉サービス担当者、担当医師などを含めた「ケース会議」や卒業後に向けた「移行支援会議」を実施している。

卒業後の地域生活に向けて、交流及び共同学習の取組が進み、児童生徒同士の相互理解が進んでいる。更なる基盤づくりを目指し、関係機関の要請や、本校の広報活動を通して、地域住民の方々への研修会の実施も積み重ねている。変化の激しい時代を、子どもたちが豊かに暮らしていくためにも、今後、「連携」を心掛けながら、学校教育の充実に取り組みたい。

5 おわりに

『画』と、福祉を利用するための『障害児支援利用計画』を照らし合わせる協議内容を盛り込んだ。加えて、保護者の要望と必要度に応じて、医療受診に教員が同行したり、学校生活の様子についての情報提供資料を作成し、受診時に保護者に持参していただいたりすることで、医療機関との連携を深めることもできている。結果として、本校児童生徒の地域における切れ目ない支援体制ができ、卒業後の社会参加に向けた、子どもの成長を見守る応援団づくりに繋げることができている。